

## 山形県現代俳句協会会報

第24号  
令和2年12月

## 思(う)じ(こ)を少し

山形県現代俳句協会会長 大類つとむ

先の見えないコロナ禍の月日が思ったよりも長くつづき、思いを超えたさまざまな現象を生みつけています。世相や流行にあまり大きな影響を受けないと思われる俳句界に於いても数多の變化が生じています。何より人が集わない、集ってほならないという不文律は、「句会」という俳句に係わる者にとつて欠かせない重大事を妨げる事となりました。リモート句会やネット句会等、さまざまに工夫を凝らしておりますが、何と言っても私たちの俳句に大切な臨場感と相聞往来の充足感にはほど遠いものようです。

しかし、この機会を悲観的に捉えてばかりではいられません。逆に、個々の充実した時間と深く物事を考え、学ぶという点に於いては、今後なかなか得られない日々とも思われます。人それぞれの影響があるかと思いますが、今までより一層の句の充実を得られれば……と私なりに思っているところです。安易に「コロナ禍」などと句に用いず、それによる本質とそこに居る人間を詠んでいきたいとも思っています。県現代俳句協会の集まりもなかなか行なう事が出来ませんでした。秋の吟行会だけでも……と考えま

したが、やはり世相が許さない現状です。しばらくは会報の誌上句会等に力を入れていきたいと思っておりますが、会員各位からの積極的、発展的なご意見、ご提案を期待します。

来令和三年は「おくのほそ道」の途次、尾花沢十泊十一日を世話歓待した芭蕉の知友・鈴木清風の没後三百年にあたります。市では芭蕉、清風歴史資料館での「清風展(仮称)」を中心にさまざまな企画を練っているところです。少なからず係わっている私は是非「市民俳句大会」的なものを期待しているのですが、なかなか大きな賛同を得られないのではありません。以前より何度かこの催しを行っているのですが、出句数がなかなか伸びません。市は子供たちに俳句を強く奨励しているのですが、その大人たちはそろって作句に二の足を踏むようです。確かに解らぬ事ではありませんが、「芭蕉十泊の町」を何かにつけて口にしてはいる割に、俳句には然程関心がないようです。芭蕉が十一日間に蒔いた俳諧の種の成長した姿は、私たちが大いに俳句に関心を持つことだと思っております。皆がちよつとした時間に俳句をつくって、笑いあい讃えあう事を日常に持てれば素晴らしい芭蕉の種の開花ではないでしょうか。初めての俳句づくりには誘える方法を模索しています。

会員の皆様、向寒の折、くれぐれもご自愛ください。

## 現代俳句の秀句を読む 1

白桃を食ふほの紅きところより 佐藤鬼房

平成四年刊第十句集『瀬頭』の中の一句である。一読すると、難解な言葉は使われていない。かえって簡単な言葉の中こそ鬼房の思いやメタファーが込められている。

桃の原産は中国といわれ、日本では弥生時代の遺跡から桃の種が見つかっている他、古事記や日本書紀にも記載がある。中国には、桃を食べた仙人が不老不死となった説話があることから「仙果」とも呼ばれ、花や葉、枝にも邪気をはらう効果があると考えられてきた。日本でも鬼を恐れさせるといわれてきた。

ここでいう「桃」とは何を指すのだろうか。そこで注目したいのは「ほの紅き」であろう。紅いから連想するのはやはり「血」である。不死の果物「桃」のより生命を感じるところから食すというわけである。しかし、それだけではなく鬼房の俳句への執着とみることもできる。ただの白い果実のところではない「ほの紅き」場所を食らう。

鑑賞とは関係ないかもしれないが、桃という形ゆえに臀部をイメージしてしまう。黄桃なら少年、白桃なら赤子や少女か。そのような解釈をすると句の取り方が全く異なってしまうのだが。見当違いである。失礼した。

生命力の象徴であるような「桃」を食すのである。やはりここでは鬼房の自身の体への不安が作品に表れていると取るべきかもしれない。(須藤 結)

『小熊座』令和二年十二月号

鬼房の秀句を読む124より転載

県現代俳句協会総会俳句会

10・10 山形市民会館

- 1 半夏生コロナにおびえ老い縮む 小林美代子
- 2 陽を包み風を包みて白牡丹 "
- 3 九十路まだ煩惱は無限なり "
- 4 ただ今の声に風鈴鳴り始め 大泉 秀明
- 5 信号を待つ秋の夜に赤い雨 "
- 6 秋夕焼そよ風狭く抜ける橋 "
- 7 遠雷やこむら返りの夜が来る 大志田勇志
- 8 こほろぎの子に懐かれてゐる夜半 "
- 9 星の数超ゆる目潜む露葎 "
- 10 白緋むかし天才血を吐けり 工藤 博司
- 11 出羽の人丈より低く稲架を組む "
- 12 紅の花枯れて有情の紅残す "
- 13 隠沼をルーペでさがす呉夫の忌 新野 祐子
- 14 胎内と呼びたき川よ岩魚湧く "
- 15 曼珠沙華私の中に飛火して "
- 16 輪唱の子らと山彦天高し 佐竹 伸一
- 17 行先は陽の射すところ秋の蝶 "
- 18 霧雨やヘッドライトの砂利の道 "
- 19 水澄むや水の地球は毀れがち 渡辺 竹女
- 20 邂逅の親しみ増すや木の葉髪 "
- 21 過去はみな涼風となる夕まぐれ "
- 22 いさかしの心花野に来ていやす 柏崎 青波
- 23 忌中の紙貼られカナカナ啼きに来る "
- 24 鳶われを縛るはやり病の世 "
- 25 下校児のあいさつ弾む稲田道 黒谷博楽子
- 26 小学生草切るように稲を刈る "
- 27 日暮れきて声逃げていく西瓜売り "

- 28 ドツコ沼の静寂破る青トンボ 阿部 貴美
- 29 横笛の端に父の名祭り来る "
- 30 草とは言え無病息災の莧を干す "
- 31 駐在所なくなつてより黴の世に 大類つとむ
- 32 ひらひらをひらと追ひ抜き蝶の昼 "
- 33 白桃の熟れてそはそは街そはそは "
- 34 我に欲し猫の目力風は秋 木嶋 玲子
- 35 秋日濃し樹下に憩へる乳母車 "
- 36 吾亦紅錆びゆくものに鉄と我 "
- 37 遊行忌や街に唯一の時宗寺院 井上 康子
- 38 ルームミラー去年の赤い羽根付けしまま "
- 39 もう少し生きたいと師の敗戦日 "
- 40 桃の実の赤黒きほどおぞまじや 松浦 廣江
- 41 お目あては冊子の付録赤まんなま "
- 42 老僧の衣終いや秋日日和 "
- 43 血碧く秋刀魚一匹とり逃がす 東海林光代
- 44 椿の実転げて瘤を太らせる "
- 45 マスク欲しいと実験室のシヤレコウベ "
- 46 水郷の古老も知らぬ大出水 瀬野 史
- 47 コロナ禍の罇を窓辺へ望の月 "
- 48 萩刈つて裏家の灯火近づけり "
- 49 神無月すでに危うしコロナの禍 畠山カツ子
- 50 人の世の輪廻転生鳥渡る "
- 51 竜の玉飛ぶや賢治の星めぐり "
- 52 三陸や祈りとエールの秋の旅 阿部 雅子
- 53 宝来館の女将と交わす秋桜 "
- 54 志津川湾変わらぬカモメ秋澄めり "
- 55 ひと雨の魔法かかりしダリア園 梅木 啓子
- 56 還暦の女五人や秋野行く "
- 57 ほじよ輪を外して吾子の秋日和 "
- 58 ご老体ねずみ花火に腰伸びて 広野 草雄

- 59 兄妹の団子の談議秋彼岸 広野 草雄
- 60 椅子頼る体操に慣れ施設秋 "
- 61 太古よりひとりぼつちのお月さま 堀 尚子
- 62 雉鳩の頭かくかく秋思かな "
- 63 冷まじや句会の座席隔てらる "
- 64 出勤のワイパーゆるりと秋拭う 須藤 結
- 65 秋の夜の採点ペンの丸の音 "
- 66 ねこじやらし愚痴を言い合う仲であり "

【選句結果】 特選2点 入選1点

- 七点句 36 (特2 入3)
- 六点句 29 (入6)
- 四点句 3 (特1 入2)
- 四点句 19 (特1 入2)
- 三点句 51 (特1 入1)
- 二点句 5 13 43 45 (特1)
- 二点句 10 14 15 16 21 65 (入2)
- 一点句 (入1)

【七点句作品鑑賞】

36 吾亦紅錆びゆくものに鉄と我 木嶋 玲子

吾亦紅という優雅な和名を持つこの植物は、野山に自生して細かな花弁を棒状に付け、地味で目立たない。英語名はブラッド・ウオート。

花の色は暗い赤紫と言うか濃いエンジ色で、作者はそこから鉄の錆色を連想し、更に発展させて人間の有り様に迫っている。年経れば、人は体液(血液)も次第に濁り、あちこちが錆びていくようだと詠んで説得力がある。(東海林光代)

## 古川京子さんを悼む

堀尚子

古川京子さんが、十月九日八十八歳で逝去されました。山形県現代俳句協会の役員として庄内地区が当番の時は事務局長を務めるなど長年活躍されましたが、残念なことに体調を崩され平成三十一年一月に退会されました。

振り返れば、古川さんと私は長いお付き合いです。昭和五十七年私は四十五歳で山形県立鶴岡養護学校に赴任しました。私は中学部に所属し、古川さんは小学部で教育相談室での就学指導、言葉の発達に遅れのある子ども達の指導にあたりておられました。当時は、教職員のサークル活動が盛んで、「鶴養文芸サークル」もそのひとつでした。中学校の英語の教師として過ごしてきて俳句には全く無縁であった私は、彼女の優しいけれども強力なお誘いに負けて何だかよくわからぬまま入ってしまいました。これが私の俳句のスタートでした。古川さんは秋田大学在学中に俳句を始め、加藤楸邨、田川飛旅子に師事し、すでに素晴らしい俳句歴をもっておられました。

とにかく俳句が大好きで周囲の人達を誘って来られました。現在「陸」と「飄逸の会」で俳句を続けている人たちはみな古川さんの息がかかっています。その後、私は誘われるままに「陸」と現代俳句協会にもお世話になることになりました。忘れられない思い出があります。「陸」に入って間もないころ羽黒山に吟行に行きました。私は特に準備もせずぶらっと出かけましたが、古川さんは芭蕉のこ

と、南谷のことをちゃんと下調べして句を作っておられました。叱られたわけではありませんが、俳句をするというのはこういう事なのだと思います。されました。

「鶴養文芸サークル」は、会員が退職、転任しても「飄逸の会」として存続し、養護学校関係者以外の方も入会して今日に至っています。古川さんにはその間ずっと丁寧にご指導いただきました。「陸」鶴岡の例会や東北吟行会など一緒に過ごした楽しい思い出がたくさんあります。

平成五年に定年退職され、六年より朝日村（現在鶴岡市）の幼児と小学校低学年のための「こたばの教室」に勤められました。車を運転されなかつたので通うのは大変だったと思います。退職されてからも障害を持つ子どもたちのために労苦を惜しまず働かれたことに頭が下がります。俳句と障害を持つ子ども達の教育は古川先生の人生を支える二本の柱であったと思います。

平成十七年に、句集『魁夷の青』が上梓されました。古川さんは自分では絵を描かれませんでした。鑑賞は大好きでした。句集の名前は東山魁夷の絵からとられました。「陸」鶴岡俳句会と「飄逸の会」合同でお祝いしました。当日の写真をみると、故人となられた会員の笑顔が並び感無量です。障害を持つ子ども達と共に生きる目線の低さ、愛情の深さに深い共感を覚えます。

平成三十年五月の「飄逸の会」羽黒山吟行では駐車場から五重塔まで歩いて登られました。その後、宿坊の精進料理や句会を楽しまれ、とても元気だったのでこんなに早くお別れの日が来るとは誰も考えていませんでした。私は鶴岡の俳句会

のことも、山形県現代俳句協会のこともすっかり古川さんに頼っていて、くつついていけば安心と思つて長年過ごしていました。今は大きな穴が開いたような気持ちです。年を重ねるばかりで俳句では全く及びませんが、これからはもつと俳句が好きになつてご恩返しをしたいと思えます。

古川さんは、優しく、強靱でぶれない方でした。俳句だけでなく、教育相談でも一緒に勉強させていただき、人となりに触れることができて本当に幸せでした。古川京子さん、ありがとうございました。安らかに憩われますことを心からお祈り申し上げます。

## 句集『魁夷の青』から

初風や魁夷の青を溜めてをり  
口唇音かすかに出たりしやぼん玉  
麻痺の児と土管いづれば燕の子  
春夕焼け子らのさよなら幾度も  
冬銀河修正なしで生きてきて  
掬ふ泥に雪の清浄こもりをらん



合同祝賀会にて  
(前列左から2番目が古川京子さん)

新役員紹介

俳句と私

新野 祐子

今年十月十日に行われた総会にて、私が新たに幹事、そして木嶋さんの後任の事業部をやらせていただくことになりました。山形県現代俳句協会には二〇一二年に入会とはいえ、俳句会や総会にはほとんど参加せず、言わば新参者です。力不足な上、このコロナ禍でどのような働きができるか不安なものがありますが、どうぞよろしくお願ひします。

さて、この度抱負のようなものを書いてという要望が、広報部長の佐竹さんからありました。この場をお借りして、私の俳句との出会いについて書かせていただきます。

初めて俳句を知ったのは短大の学長の授業でした。学長は太平洋戦争に出征し足を負傷し障害が残りました。表情に少し影がありました。講義は与謝蕪村の俳句だったのです。「しら梅や誰むかしより垣の外」公達に狐化けたり宵の春「愁ひつ岡にのぼれば花いばら」等々の句を取り上げて、口述筆記の授業でした。「俳諧は俗語を用いて俗を離るるを尊ぶ」というところに赤線を引いていました。このノートはまだ大切に取ってあります。

次の出会いは、山頭火の生涯を描いた、いわしげ孝の漫画『まっすぐな道でさみしい』です。二〇〇四年の秋、購読している『週刊金曜日』の書評欄にあり、興味が湧いてすぐに買い求めました。山頭火の今まで読んだことのない「無季不定型句」に瞠

目させられました。「すべてころんで山がひとつそり」「よい宿でどちらも山で前が酒屋で」「締めて一人の障子を虫が来てたたく」、当時好きだった句です。そういえば若い頃勤めていた会社で、友人が「彼は山頭火のお孫さんだよ」とそとと教えてくれました。種田元治さんと言ひ、温厚な方でした。俳句を始めていた芳賀則政さんに、「自由律っていいね。やってみようかな」と聞いたら、「まず五七五をちゃんと作ってからでない」とだめなのでは」との答えでした。そのうち熱も冷めてしまつて、時たま朝日俳壇を眺める程度でした。

二〇〇七年二月、友人の提案で芳賀さんに俳句を教えてもらうことになりました。二人だけの生徒も回を重ねて六人になりました。ある時、芳賀さんから「結社に入つて修行せよ」と言われました。考えてもみなかったことなので、芳賀さんが入つている「海程」を見せてもらいました。朝日俳壇に登場する作者が何人もいるし、寺山修司のライバルだった京武久美さんもいるし、なんといつても現代俳句の巨匠金子兜太が主宰です。怖いもの知らずで「海程」に決めました。

初投句は二〇一〇年十月、この時から同人になれるまでの三年間は疾風怒濤の日々でした。やつと肩の力を抜いて句作できるようにはなりませんが、成長しているとはとても思えません。今後とも皆様から良き刺激、ご教示をいただき、句を深めていければと願っております。



予告 第35回現代俳句東北大会

令和3年9月25日(土)

岩手県盛岡市「エスポワールいわて」にて

〈編集後記〉

◇定年退職後、地元の町で俳句会を立ち上げました。私を含め僅か五名の小さなグループである。

きっかけや経歴は様々だがきちんとして俳句を学んでみたいという人達が集まった。メンバーは皆私よりも年上というのが気にはなるが、俳句を始めるのに遅すぎるということはなく、皆青年のように生き生きと実作を通してながら俳句に向き合っている。いずれは、現俳協の仲間にと期待している。

さて、これまでは、コロナウイルス感染予防のために、広い会場でマスクをかけた十分なソーシャルディスタンスを保ちながら月一回の句会を行ってきたが、第三波の急激な拡大のため、今後の実施が懸念される状況になってきた。初学の仲間たちの俳句への関心が薄れることがないように、句会の代替策のいくつかも講じておきたい。

◇「現代俳句の秀句を読む」のコーナーを立ち上げた。一回目は、現俳協へ新規加入の小熊座同人・須藤結さんの鑑賞文である。(佐竹伸一)

会報24号	令和二年十二月発行
発行人	大類つとむ
発行所	山形県現代俳句協会
	〒九九九-四二二七
	尾花沢市中町五-二〇
事務局	〒九九七-〇〇四四
	鶴岡市新海町二三一-八
	堀 尚子